○平　進介議長　11番、赤間**桊**広議員。

○１１番　赤間桊広議員　ありがとうございました。

以上で質問を終わります。

梅津善之議員の質問

○平　進介議長　次に、順位12番、議席番号12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　どうもおはようございます。

きのう、おとといと、市内というか、地区内、県内一斉だと思いますけど、中学校の中体連の大会がありました。私の娘も２年生になって一生懸命部活動なり、いろいろ練習なり頑張っているので、親として応援に行かなきゃいけないなと思いながら、あやめの開園式を早々に応援に行ってまいりました。残念ながら、どこが勝ってもおかしくなかったんですが、負けてしまいまして、悔し涙をのんで、励まして、自分ら、来年もう１年あるということで、頑張ろうななんていう話を親子でしてきたところでございます。さらに、子供たちの反省会を終わしてから、父兄のというか、３年生の父兄も交えて反省会をさせていただいて、男女バスケ部、さらにバレー部も含めて、２次会では中心市街地の活性化に一生懸命努めてまいりました。試合には負けましたが、応援と声出しには負けないようにマイク奪い合って頑張ってきましたので、よろしくお願いしたいと思います。

きょうは、３月定例会でも教育長といろんな話をさせていただきましたし、これからの教育ということで話をさせていただきたいなと思っておりますし、あくまでも教育長の考え方なり、方針でありますし、当然長井市が教育と子育てに力を入れていくんだという思いも含めて、私の考えもぜひ聞いていただきたいなと思って、きょうさせていただきますので、よろしくお願いしたいと思います。

まず、今までの学校教育では限界があるんではないかという思いでございます。自分たちが一生懸命小学校、中学校で学んできた時代とかなり変わってきている、もちろん教育の中身も変わってきているし、やり方も徐々には変わってきているような感じを受けているところではありますけども、今現状、さまざまな不登校の問題であったり、ひきこもりであったり、教育というのは非常に大切だと思うのは、さまざまな教育をした結果がやっぱり10年後、20年後に結果が出てくるということだと思います。非常に難しいことだと思いますけども、そういったことを含めて、これからの教育に本当に大切なことは何か、もちろんそれは学校教育だけでなくて、家庭の中の教育であったり、社会教育であったりということも含めて、あると思いますけども、今まで教室の中でみんな一緒でいいのかということを私も疑問に思ったことがあります。

小学校のころに、先生、わかりませんと手を挙げて言ったことがあって、何だ、梅津、何がわかないんだと、わかんないことがわかんないんだということを言ったら、先生に怒られて、後で職員室に行った覚えがあるんですけども、みんな一緒に同じ授業して、それがテストや何かで評価されて学んできたという過程から、今では個々に丁寧にという話をいつも先生方に、もちろん自分の子供たちも聞いているんですが、その度合いも含めて、これからはもっと個々を大切にした教育に変えていくべきではないかななんていうことを思ったので、その辺について、まず教育長からお伺いしたいと思いますし、やっぱりいじめであったり、体罰であったり、落ちこぼれや中学校に行ったときのギャップや、先生の多忙、そして、勉強する意味の喪失とか、

同調の圧力、不登校、何か別々に見えることもこの教育のシステムにもうつながっているんではないかなということを思っております。その辺について、教育長にお伺いしたいと思います。

○平　進介議長　平田　裕教育長。

○平田　裕教育長　学校教育につきまして、梅津議員のほうからご質問いただきましたが、このご質問は大変根源的な、ある意味、日本の教育制度にかかわる問題であるというふうに思いますので、最初ちょっと時間をいただいて、制度ともかかわってまいりますので、少しだけ時間をいただいて答弁させていただきたいというふうに思います。

現在、議員からご指摘ありましたとおり、確かに一斉に読んだり、一斉に書いたり、同じですと言ったり、そういういわゆる一斉授業、これが数多く見られることは、これは事実であります。このようなスタイルといいますか、これを振り返ってみると、原点は、明治５年までさかのぼるだろうというふうに思います。要するに明治５年の学制発布、日本の学校教育制度がスタートした、それ以前は、もちろん寺子屋とか、藩校とかの教育はあったわけですけども、学校制度として確立したのは、この明治５年、学制発布によるとというふうに思います。その後、明治19年に、森有礼によります学校令、これが出されて、現在にどんどん近づいてくるわけでございます。ただ、途中ちょっとはしょりますけども、まさに今の学校教育の原型といいますか、それをつくったのは、戦後、昭和22年、教育基本方針及び学校教育法によって現在の学校教育の土台がつくられたというふうに思います。

これ、皆さんご案内のとおり、この教育基本法第１条には、教育の目的が記してございます。平成18年、一部改正をしておりますけれども、基本的には変わっておりません。ちょっと読み上げてみます。教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。これは平成18年に改正されたものですが、もとのものはもうちょっと長かったんですけども、端的に示されている、教育の目的が示されている。つまり、人格の完成だ、それから、社会の形成者として必要な資質、能力を備えた、そういう国民の育成を学校教育は担っていかなきゃいけないんだということだろうというふうに思います。

戦後ですけども、この高度経済成長、これを支えたのは、みんながルールを守って、しかも、勤勉で、良質な労働力、これが日本の高度経済成長を支えたと。これは恐らく大方の認めるところだろうというふうに思います。それは、日本人の特性であったり、高い品質を常に生み出す努力であったり、みんなが同じ方向を向いて、みんなで豊かになろうというふうに取り組んでいた姿だろうというふうに思います。それがＧＤＰで現在は世界第３位、中国に抜かれていますけれども、1990年代の一時期は、アメリカに次いでＧＤＰが第２位という時代があったわけですけれども、その国内総生産、世界第２位をもたらした原動力はここの教育にあったんではないかなというふうに考えているところでございます。つまり、それまではみんなで一緒に同じ方向向いての教育は、効率的に知識とか技能とかを身につけさせることに非常に成功していた。社会成長とマッチしていたというふうに思います。このことに目をつけたイギリスなんかは、逆に日本の教育に学んだという経緯もございます。それまでは一応成功していたというふうに言えるかと思います。

ところが、議員からご指摘ありましたとおり、平成に入りますと、校内暴力、いじめ、それから、使いたくない言葉ですけども、落ちこぼれ、教育関係者は落ちこぼしというふうに言っておりますけども、それから自殺等々、さまざまな

社会問題、表面化してまいりました。これがやっぱり一つは一斉画一授業に問題があるんじゃないですかという、やはりそういう提言をなされる教育者の方はたくさんいらっしゃったわけです。これを受けまして、文部科学省のほうでは、2002年、平成14年になりますけども、いわゆるゆとり教育をスローガンとした指導要領ができ上がるわけです。これによって、詰め込みからの脱却ということを物すごく目指しました。授業も変えなきゃいけない、今までのような一斉画一授業で先生が黒板で説明して、ノートに写してください、これ、大事です、覚えてくださいという授業から脱皮しなきゃいけないというふうな方向性になりました。それによって、教科内容が大きく削減されました。時数も削減されました。このときは、時数の削減以上に教科内容を削減するということで、その浮いた部分で総合的な学習が今もやられていますけども、総合的な学習が創設されました。それは、やはりそういう詰め込み教育からの脱却ということを制度的に行ってきたということだろうというふうに思います。

ところが、10年もしないうちに、これが大きな批判を受けます。皆さんご存じのとおり、学力低下の批判です。国際的に学力低下しているんじゃないですかと。これは内容を減らし過ぎたんでしょというようなことで、現行の指導要領、間もなく終わるんですけれども、今年度で最終年度なんですが、この今の指導要領に至るときに、いわゆる教育再生会議で10％内容増が盛り込まれたんです。それによって、もう一度学力を上げていこうという動きが国全体の取り組みとしてなされました。いわゆる脱ゆとり路線というふうに言われるものでございます。そのときには、これからの国際社会を目指して英語活動の導入なども行われたわけでございます。

そして、現在、新指導要領、また新たな指導要領への移行を進めておりますけども、2020年、ちょうど東京オリパラの年から、来年からですね、来年の４月から完全実施されるわけですけれども、小学校完全実施ですけども、その中では、英語の教科化を初め、道徳の教科化、それからプログラミング学習、情報教育、いわゆるソサエティー5.0を目指した教育などもうたわれております。そして、最も大事なのは、これまでの知識、理解重視から、資質、能力育成に大きく指導要領がかじを切ったんです。何を教えるかということよりも、一人一人が何ができるようになっているんですか、なったんですかということが大事にされる、いわゆるアクティブラーニングというようなことも言われましたけども、ちょっと誤解されるということで、文科省のほうでは主体的、対話的で深い学びという言葉を使っておりますが、この学びへの転換をし、資質、能力育成に大きくかじを切っているところでございます。つまり、議員おっしゃいますように、これまでのような一斉画一の授業では不十分でございます、まさに。子供一人一人の資質、能力を育成する指導へと大きくかじを切っていく、転換していく必要があります。ただ、今まだその途中であるということでございまして、完全にそこにそういう授業が全ての学校でできているわけではありません。

ただ、一つつけ加えたいのは、じゃあ、一斉授業がだめなのかと、みんなで一緒に同じことをするのは悪いのかというと、そうではないというふうに思います。結局は、どういう力をつけたいかということによって、指導方法を柔軟に、多様に用いていく必要があるというふうに考えているところでございます。

ちょっと長くなりましたけども、みんな一緒ということのよさと、そして、これから求められる資質を高めていくには、やっぱりそれじゃいけないということの２つ、その両面から現在学校教育進めているところでございます。ちょっと長くなりまして、済みません。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　ちょうど教育が変わろうとしているということも当然あると思いますし、だからこそ、本市でというか、小学校も含めて、中学校６校の中で、ぜひ先生方とあわせて、校長先生も含めて、さまざまな教育のことをまずは現状を否定をして、どうするんだという話をまず先生方、もちろん保護者も含めて、徹底的にやることが非常に大切であると私は思っておりますし、本当にそれが結果としていがったかどうかなんてというのは、本当に10年、20年先じゃないと出てこないわけですよね。それでも今までやってきたことがさまざまな人間形成においても、いろんな人をつくり出してきてしまっているという現実には変わりないですし、全ての子たちを否定するわけではない、もちろん一斉の教育もよかったし、その中でも、個々を磨き上げる、個々を育てる授業であったり、指導法であったりを先生みずからが学んだり、教え合ったりすることが大切なことだということと思っておりますし、ただ授業を教えたではなくて、そのクラスの子供たちにいかに理解して、さらには、みずから学ぼうとする気持ちを持たせてやれる指導ができるかということが問われているのではないかと思っています。それは、学習だけでなくて、運動でも、社会的なことでも同じようなことだと思いますし、やっぱりそういう子供たちを育てていかないと、将来はなかなかいろんな事件や事故が起こってくるような気がすると、非常に心配している。で、ここでは、リヒテルズ直子さん、もちろん長井市にもおいでいただいて、いろんな教育をご指導いただいた経過もございますし、イエナプランというドイツ発祥のオランダで実践されている教育が非常に子供たちが居心地のいいクラスなり、学校に変わってきているし、学力も非常に伸びてきているということがもう実証されている。もう全て、それが全てでは、私は、ないと思いますけども、そういったことを現況の教育の中でも取り入れていくことは難しいことではないということを言っている先生方もたくさんいらっしゃるんですよね。やっぱりみんな座って、これだこれだと詰め込み型の教育をさせられているよりも、みずから学ぼうとする思いを育てていく教育が非常に大切ではないかなと思っておりますので、その辺については、教育長はどのように考えているか、お聞きしたいと思っております。

○平　進介議長　平田　裕教育長。

○平田　裕教育長　今、議員がおっしゃったとおり、これ、俺は教えたからなということでは、これまではよかったかもしれませんけども、これからはそれでは先生の責任は全うできないというふうに思います。ちゃんと子供一人一人にどういう力がついたのかということがやっぱり成果として問われる。それがむしろ先生の責任であり、それが指導した、力がつかなければ指導したということにはならないだろうというふうに思います。まさに今、授業の転換点を迎えているというふうに思います。

議員からは、子供たちが受け身で、先生から言われて、右向けたら右、左向けたら左と、そういうようなことでいいのかというようなお話もいただいたわけですけども、結局は、教師がしなきゃいけないのは、言われたことをちゃんとやる子供も大事なんだけども、それ以上に、自分で考えて、自分で行動できる子供、やっぱりここを育てていかないとだめだろうというふうに思います。

主体性をどういうふうに育てていけばいいのかという問題になろうと思いますけども、私いつも、この子供が受け身でなくて、積極的に自分からやっていく、主体的な子供たち、人間になっていくためには、必要なこととして、よく日本で言われてきた守破離ということをいつも頭に思い描きます。守破離というのは、当然茶

道とか武芸等で使われている言葉ですけども、幼くは教えを守り、道を求めるときになれば教えを破り、やがて我が道を得て教えを離れるというふうに言われているわけですけども、発達段階の初期から、あなた、自由にやりなさいということではなくて、むしろ発達段階の初期にはやはり基礎、基本をしっかりと身につけさせることが大事だろうというふうに思います。その上で、それがずっといつまでも教えることだけではなくて、やはりそこから自分なりの姿をつくっていく、自分なりの課題追求をしていけるように育てていくのが教育なんじゃないかなというふうに思っているところでございます。

したがいまして、その発達段階を考えるということ、そして、土台となるものがあって、初めて自分なりの追求が可能になるというふうに考えているところでございますので、逆に言うと、守だけでとどまっていたのがこれまでの教育だったのかなと。やっぱりそこから言われたことを言われたとおりにということから、次のステップにやっぱり進めるような授業に改善していかなきゃいけないというふうに思います。主体的な追求につないでやるのが教師のもう一つの大事な仕事というふうに考えております。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　教育長の力強いお言葉、本当に大切だと思いますし、ぜひ、先生方、ちょうど大量退職というか、多くの先生が先生になって、ちょうど新しい先生が今、一生懸命変わろうとしている時代でありますし、若い先生がたくさん新任になって、教師目指して頑張ってきているところでございますので、そういうことも含めて、ぜひ教育に力を入れて、思いのある子供たちに育っていただきたいなと思っております。

一つ、私の小さいころのことを思い出したんですけども、小学校５年生のときに、登校してくるときに、ある同級生が捨て猫を拾ってきたんですね。学校まで持ってきて、教室の後ろのほうに箱みたいなのに置いて、担任の先生が来るまで待ってて、どうするんだと、これはもう先生に怒られるぞという話で、ちょっとおまえ、梅津、言えという話で、担任の先生はすごく厳格で厳しい先生で、本当に今で言えば、もう、すぐ首ですよね。暴力のほうが厳しかったような先生だったんで、恐る恐る言ったんです。先生は怒らなかったんですね。飼っていいと。でも、やっぱり木造校舎で、当時もネズミもいたかどうかは別にして、二、三カ月飼わせていただいて、猫だから悪いこともするわけですよ。みんなでそれを話し合って、誰が引き取るんだなんていうことを含めて、最終的には同級生の一人が、じゃあ、うちで飼うかなんていうことで持っていったような気がします。そういう生き物を大切にするとか、いろんな思いがそこで多分、クラスの中で育まれたと思いますし、そこで多分、先生にだめだと言われてたら反発しかなかったのかななんてふっと思ったところでございます。私自身はいい先生に出会えてよかったなと、今も感謝しているところでございますけども、さまざまな先生がいる中で、ぜひそういう思いを持った先生を育てていってほしいと思いますし、教育長にはその先頭に立って一生懸命やっていただきたいと思います。

先ほど言ったイエナプランでございますけども、創始者であるペーター・ペーターゼンという方がこんなことを書いております。将来どんな政治的、経済的な状況が生じるか、私たちには誰も知らないと。未来は人々の不満、利益追求、闘争、そして、今の私たちには想像のできない新たな経済的、政治的、社会的状況によって決まるだろう。けれども、たった一つ、確信を持って言えることがあると。全ての厳しく険しい問題は、問題に取り組んでいこうとする人々がいて、彼らにその問題を乗り越えていくだけの能力と覚悟があれば解決されるであろう

と。この人たちは親切で友好的で、互いに尊重する心を持ち、人を助ける心構えができており、自分に与えられた課題を一生懸命やろうとする意思を持ち、人の犠牲になる覚悟があり、真摯でうそがなく、自己中心的ではない人々でなければならない。そして、その人々の中に不平を述べることなく、ほかの人より一層働く覚悟がある者がいなくてはならないだろうということを私も思いますし、実はこれを、この文章をいただいたのは、民間企業から校長先生になられて、そして今、広島県の教育長をなされておる平川理恵教育長がこのことを書いておられます。

民間企業から神奈川県の中学校の校長を経験されて、今は広島県の教育長に就任されて、何よりその教育長が一生懸命やっているのは、生徒も先生もみんな一緒だと。教育長でありながらという言い方は失礼なんですが、一緒に各教室を回って、子供たちと一緒に机を並べて、先生の授業を受けて、さらに、それを先生にアドバイスをしたり、よかったこと、そうでないことも含めて、現場を走り回っているという。いろんな考え方はあるかもしれないですけども、やっぱり子供たちに寄り添って、同じ目線で考えて、これからの教育を考えていくということを実践なされている方だなと思っておりますし、県の定例会の日程にもかかわらず、ほかの学校、小学校、中学校、高校までみずから授業を受けに行っているなんていう話をお聞きします。ぜひ、教育長も当然教育者であって、校長先生も経験されていると思います。現場、先生方、子供たちが本当に生き生きとしている姿があってこその本当の教育だと思っておりますので、お忙しい中ではありますけども、やっぱり全体の中の教室であったり、学校をくまなく見ていただければありがたいと思いますけども、その辺は教育長、いかがでしょうか。

○平　進介議長　平田　裕教育長。

○平田　裕教育長　私もできるだけ何もないときは学校のほうを訪問させていただこうというふうにしているところでございますけども、ただ、学校教育課長おるわけでございますが、それと、指導主事２名配置していただいておりますけども、課長以下、本当に学校現場と本当にタッグを組みながら、例えば学校に来たがらない生徒がいるということであれば、それへの対応策はさまざま、カウンセラーも交えて、即対応したり、それから、学習指導で悩んでいる教員がいれば、こういう資料があるということで、指導主事がお届けをしたり、そんなことをしたりしながら、あるいは、ちょっと授業が心配なクラス、落ちついてないクラスがあるなんていうことなんてあれば、その指導主事を派遣して、さまざまアドバイスをして、支援をするような仕組みにもしてございますので、私自身はなかなか実際には学校現場に足しげく通うということはなかなかできないんですけども、気持ちの上では全く学校の現場の先生と一緒でございますので、校長先生、教頭先生、そして、直接指導に当たる先生方と気持ちを一緒にしながら、さっき議員がおっしゃったように、やっぱり一人一人が自分の志を持って、志高く、将来に進んでいけるように、そういう教育を何とか実現したいというふうに思っているところでございます。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　ぜひ将来の子供たちにそういった思いも伝えていただいて、教育現場の先頭に立っていただきたいと思います。

最初に言い忘れました、竹田学校教育課長も中体連にお顔を見せていただいて本当にありがとうございました。各種目、相当回っておられたんだななんて思いながら、うれしかったです。ありがとうございました。

では、２番目の質問に移ります。不登校についてということで、これはＮＨＫの番組でもやっておりましたけども、何とかしなきゃいけな

いということも含めて、長井市で取り組みなり、さまざまな原因があってそうなっていると私も思いますし、親御さんの心配であったり、事情において適切な本当に指導をしているとは思いますけども、その辺も教育長にお伺いしたいと思います。

○平　進介議長　平田　裕教育長。

○平田　裕教育長　市内の不登校の状況については、さまざまな場面でご報告もさせていただいているところでございますけども、実は昨年度も、30日以上の欠席で、いわゆる不登校に該当する児童生徒が小学生で４名、中学生で13名、計17名おりました。それから、それ以外にも校外の適応指導教室に登校したり、学校には登校したものの、教室に入ることができず、別室で学習をしたり、そうした児童生徒もいるところでございます。

議員のほうからどういう理由で不登校になるのかといったことでございますけれども、さまざま、アンケート調査等をしてございますが、簡単に申し上げますと、一人として同じ理由がないというのが実情でございます。アンケートには、次のように書かれております。友人関係のトラブルがきっかけで学校に行きにくくなった、それから、ある子供は勉強がわからないから学校に行きたくない、それから、ある子供は学校の決まりがきつ過ぎる、それから、ある子供はおうちの中でちょっとごたごたしてて学校へ行く、そういう気持ちが起こらない、さまざま。それから、そのほかにも、発達の障がいを抱えていたり、さまざまな実情で、あるいは、夜遅くまでスマホをして、次の日のエネルギーが出ないなんていう生徒さんもおります。そういう生活の乱れが原因の場合など、本当に一人として同じ理由がないといったところが現状ということです。

教育委員会としましては、当然学校と連携をしながら、学級担任、それから養護教諭中心としながら、教育相談員、そして、学校教育支援員、これらがチームとなって、現在手厚く対応させていただいているところでございます。スクールカウンセラーの派遣、あるいは、医療機関等、外部関係機関との連携なども行いながら、少しでも学習の機会が確保できるように、子供たちに寄り添った支援を進めているところであります。それから、保健室以外にも、教室に入れない子供たちの部屋を各学校とも可能な限り確保して、教室には入れないけども、ほかの部屋に入れるようにというようなことでも、また、そこからできるだけ学級に戻れるようにというような配慮も学校で取り組んでいただいております。また、学校自体に足が向かないという子供さんには、生涯学習プラザ内にほっとなるスクールというものを開設しまして、何名かの児童生徒に学習支援、それから生活指導上のアドバイスなどを行っているということでございます。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　ちょうど今月号の市報をめくりますと、「一人で悩まず　まず相談」という、「教育相談室を開設しています」と、こう書かれているし、すごく大切にというか、いろんな課題を抱えた子供たちに適切に対処してらっしゃるんだななんていうことを思っておりますけども、今、教育長が学校にも自分の教室以外に、フリースクールというかな、そっと来て、教室以外のところにあるスペースがあるとおっしゃいましたけども、ここで対応してらっしゃる先生方がいろんな悩みを聞いたりして、できるだけ入れるように、もちろんそれは学校に全く行けない子はほっとなるスクールだという話もございますけども、先ほど申し上げた平川教育長が神奈川県の校長時代に30人いた不登校をゼロにしたという実績があったそうです。それはなぜかというと、やっぱり当然長井市もしてらっしゃるような、学校内にそういうスペ

ースをつくって、できるだけ戻せるというか、普通の教室で学べるような努力をして、30人いた不登校の方がゼロになったという結果があるということでございますし、一人一人の子供に寄り添っていくことが何よりも大切なこと、もちろんそれは先生方だけでは取り除くことができない、家庭的な事情であったりとかということは誰しもが抱えていることだと思いますけれども、それにも負けない思いをそこで養っていただければいいなと思いますし、今現状もうそれをやってらっしゃるというのであれば、ほっとしたところでございますし、そういうスペースがあれば、すっと戻りやすいのかななんて思ったり、例えば学校には来れないけれども、修学旅行には行きたいとか、やっぱりそういうのはあると思うんですよね。そういうところからでもいいので、ぜひ寄り添った温かい教育の場をその子たちに持っていただいて、いろんなことを学んでいけるようなことをつくっていただければありがたいと思いましたので、ここに書かせていただきました。

最後にですが、この長井市における本当に教育と子育てを大切に考えて、教育を受けるなら長井市だって本当に言えるような長井市になってほしいし、なっていただきたいし、ならなければならないと思っております。その辺、最後の教育長のお考えなり思いをお聞きしたいと思います。

○平　進介議長　平田　裕教育長。

○平田　裕教育長　今、議員からありましたとおり、長井市は、教育と子育て、これを重点戦略の第一に掲げているわけでございます。また、昨年度末に取りまとめをいたしました長井市教育振興計画、後期計画におきましても、長井市の子供たちの教育については、長井の心育成を根底に据えまして、社会がどういうふうに変化しようとも、夢を持ち続け、そして、志高く、たくましく生き抜く人間の育成、これを進めていくことを記載させていただきました。これから社会がどんどんグローバル化したり、ＡＩが進化し、ＩＣＴ技術が進化して、生活環境もどんどん変化していきますけども、人としての生き方の基本、人と人とのかかわり方の基本、これは変わらないというふうに思います。むしろこのような時代だからこそ、これから未来ある子供たちにはふるさとを愛し、そして、人に感謝し、真摯に物事に向き合い、そして、倫理を大切にする人間に成長してほしいというふうに思っているところでございます。

これらの子供たちに身につけてほしい力の育成に向けて、学校教育のみならず、社会教育、家庭教育などを含めまして、教育委員会、あるいは市を挙げて取り組んでまいりたいというふうに考えていますので、今後とも議員からもご支援いただきたいというふうに思います。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　ぜひ一緒に頑張っていきたいなと私も思っていますので、よろしくお願いします。

では、次に、大きな２番目の質問に移ります。10年前から始まって、我が市では平成26年から地域おこし協力隊というのを採用して、地域の役に立っていただくように、移住定住も含めて、大変私もいい事業だなと思って見ておりましたけども、この今までの地域おこし協力隊の経過について、地域づくり推進課長からお伺いしたいと思います。

○平　進介議長　新野弘明地域づくり推進課長。

○新野弘明地域づくり推進課長　私のほうから、地域おこし協力隊の活動の経過、実績等につきまして説明いたします。

長井市につきまして、これまで12名の方、地域おこし協力隊として受け入れてございます。議員からありましたとおり、26年度から募集し、任用を開始しております。まず、26年度につきましては５名の方でございまして、佐藤隊員、

あと、金井隊員、津田隊員、佐藤大隊員、渋谷隊員の５名が着任しております。28年度につきましては、新たに３名ということで、丸山隊員、秋元隊員、松崎隊員がそれぞれ着任して活動していただいておりまして、あと、30年度につきましては、新たにまた３名ということで、大村隊員と工藤隊員と松本隊員ということで活動していただいております。隊員の任期につきましては３年ということでございまして、今現在、今年度につきましては、４名体制でスタートしております。ただ、５月に２名、秋元隊員と松崎隊員が任期満了で退任しておりますので、今現在につきましては、工藤隊員と松本隊員、２名が現在活動中でございます。

その活動の内容でございますけども、現在はけん玉で地域おこし活動を行う松本隊員と、あと、芸術分野で地域おこし活動を行う工藤裕太隊員の２名が今現在長井市のまちづくりを盛り上げるべく活動中でございます。これまでのいずれの隊員につきましても、それぞれの活動テーマに基づきまして、市役所、関係団体、地域の皆さんと一緒に連携させていただきながら、地域おこし、地域活性化に貢献していただいているものと感じているところでございます。

なお、これまでの隊員委任者につきましては９名いらっしゃいますけども、市内に４名が残っていただきまして、県内、市外になりますけども、２名の方で、合計６名の方がここ地元に残っていただいておりまして、半数を超える67％の方がこの地域に定住していただいているところでございます。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　さまざまな形でいろんな方が目的と、お互いの、当市としてもそうですし、移住なされて、地域おこし協力隊として活躍なされてきた方の思いも含めて、12名ほど、今現在３名ということでございますけども、これは課長が考えていらっしゃることで全然結構ですので、課題なり、これから等も含めて、そういうことをどのように判断してらっしゃるか、ちょっとお聞きしたいと思います。

○平　進介議長　新野弘明地域づくり推進課長。

○新野弘明地域づくり推進課長　課題につきましては、まずは、退任終了後の課題なんですけども、まず、退任終了後の生活基盤の確保が課題と考えております。協力隊が活動内容を生かした就業、起業に結びつけられるように、任期中からサポート体制の充実が必要であると考えておるところでございます。定住に向けた支援といたしまして、長井市地域おこし協力隊定住起業支援補助金の交付要綱を制定しておりまして、100万円の上限として補助金を準備しておりますけども、やっぱりその起業、創業が対象ということになりますので、そういったところのハードルがちょっと高いかなというふうに感じていますので、そういった補助金につきましても、例えば就業に特化した支援策の構築も検討が必要と考えておるところでございます。

また、あと、隊員の募集のところですけども、今現在隊員は２名ということで、今新たに３名の方募集しておるところでございますけども、全国的に協力隊の募集が飽和状態にございまして、これまでの募集方法としましては、ホームページ、あとはＪＯＩＮ、そういったところでのＰＲを行っておりますけども、なかなか今年度３名のところの人材確保に至っていないところでございます。今検討しておりますのが、例えばふるさと長井会の青年部会に先日担当がお邪魔しまして、首都圏のほうに人づてで隊員を紹介していただけないか、そういったＰＲをかけたり、あとは、今マイナビさんと連携している自治体のほうがうまく人を集められていますので、長井市のほうもマイナビと今連携しながら、募集するすべを今調整しているところでございます。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　今現状は飽和状態でなかなか集まらないというお話でございました。

ただ、企業なりなんなりの経済活動なり、人手不足なりが深刻なわけでございまして、なかなか集まらないのも何となくわからなくもないんですけども、でも、非常に移住定住する、そして、地方に人に来ていただいて、住んでいただくような方策としては、非常に有効な事業だなと、私、前から思っておりまして、結婚して長井市で暮らしを立ててお仕事をしていらっしゃる方なんかを見ていますと、非常に生き生きとして本当に地域おこし協力隊だと思うし、自分も支援したいなと思っているところでございます。今現在も募集してらっしゃるということでございますけども、やっぱりお互いの目的なり、マッチングできるようなことが非常に私はあればいいと思っております。非常にいろんなところで苦労している事業であったり、農業関係も別な事業でもそのような募集して後継者育成や何かもしているわけですけども、さまざまな形の目的をむしろこっちから打ち出して、新しく来ていただく、これは可能かどうか別ですけども、ご協力いただくなんていうことを、目的を、あらかじめいろんな目的を、目的があってもちろん地域おこし協力隊になってくるわけだと思いますけども、そういうことを打ち出して募集するべきだなと前から思ってて、長井市はそういうことを最初から出してやっているので、なかなかいいなと思っていました。

私が言いたいのは、困っていることという言い方は非常に使いづらいんですけども、そういうことに支援していただける方であったり、もう田舎暮らしがしたいというのはもちろんだと思いますし、都会でのスキルを長井市で生かせるような募集の仕方なんていうのもあってもいいのではないかなと思っております。例えば鹿児島県の鹿屋市、これは公民館の事業でも非常に有名な市なんですけども、ここに赴任なされている女性の方なんですけども、松竹芸能に登録しながら地域おこし協力隊として赴任して、地域に笑いを与えるんだと、こういうことを目的としてしていると。地域も余り観光でも有名でないところなもんですから、地域の人を笑わせるために私は来ているんだと、いろんなイベントの司会であったり、着ぐるみであったり、さまざまなことをして、地域おこしに役立てて、地域からも喜んでいただいているなんていう事例もございましたし、そういうマッチングできるさまざまな観光もそうでしょうし、農業や各産業もそうです、こんな人がいたらいいななんていうことを、いろんな飽和状態の中にも打ち出していきながら募集をしていくべきだと、積極的にと思いますけども、その辺は、市長、どのようにお考えかお聞きしたいと思います。

○平　進介議長　内谷重治市長。

○内谷重治市長　お答えいたします。

今までの経過とか課題については、新野課長から答弁あったとおりでございますが、ちょっと振り返りますと、地域おこし協力隊というのは、なかなか私ども長井市のような都市自治体は、こちらも勉強不足で、来てもらえないと思ってたんですよ、実は。ところが、いろいろ調べたり聞いたりすると、大丈夫なんだなと。一番最初に実際私どもで考えたのは、例えばですが、フラワー長井線、人が足りなくて困っていると。それを応援してくれる人がいないだろうかということね。あと、例えばけん玉を普及させたいと。特に小学校とか、地域のいろんな行事に出向いて、けん玉を普及、技術を覚えてもらうような、そういう人がいないだろうかとか、あと、長井ダム、百秋湖のクルージングをすると。だけども、ボートの運転できる人がいないと、そういう人いないだろうか、そういうことで実は探したんですよ。これは結果として、芸術文化なんかもあったんですけども、やっぱりちょっと弱かったな、ちょっと自分勝手だった

なと。議員からもあったように、いろんな都会で暮らしてて、地方に関心ある人、また、地方で自分の今まで培った能力とか経験を生かしてみたいという人をという、純粋に考えてたんですね。ところが、途中で、これはちょっと違うのかなというふうに実は思いました。

改めて、梅津議員からもご提言いただいたように、最初から住むということを前提に、住んでもらうということを前提に募集するというのは、その視点が大切だなと思っています。例えば新規就農で、今産業活力推進課のほうで頑張っているわけですけども、また、６次産業化とか、頑張っているわけですけども、もう最初から農業したい人を地域おこし協力隊で募集するんですね。形態はいろいろあると思います。村山のガールズ農場みたいなやり方は一番うまいんだろうなとは思うんですが、６次産業化も含めて、自分でまず３年間、地域の人たちとか、そういう６次産業化で例えばかかわっている人に一緒になって、自分の勉強も兼ねていろんなアドバイスをする。結局、隊員として終わるときに、自分でそういう新規就農だったり、起業、創業を行うという人たちをやっぱり最初からそれを想定して募集すべきだったと。あとは、これは、岩手の遠野市でやっているようなんですが、私ども、中心市街地の活性化で空き店舗とかいっぱいあるんですよね。これを、まだ早いんですけども、これから我々がにぎわいづくりをしようということで、行政はそういった施設を、複合施設などをつくろうと。あと、民間の皆様を期待しているわけなんですが、多分民間の皆様も自主的にやってくださる、もちろんいらっしゃると思いますし、外から関心あって見ている人もいらっしゃると思うんですが、そういう人たちに、もう最初から中心市街地を活性化するために地域おこし、声をかけて来てください。やがては、お店やりませんかとか、何かの飲食店やりませんかとか、そういったところについては、空き店舗とか空家をぜひこういうものがいい、出してもらって、それをリノベーションして、例えばゲストハウスでもいいわけですよね。そういったものを今度は、まちづくり会社が民間でもありますし、あとは地場産業振興センター、実はまちづくり会社なんですよ、その認定をいただいていますから、経産省の補助事業等々、３分の２の補助を受けて、上限はありますけども、そういったこともできるわけですね。それを行政とか、あるいはまちづくり会社がつくって、それを貸すという手あるんですよね。

ですから、そういうふうな組み合わせをすることによって、定住につなげるなというふうに思っていますので、ぜひ今回、議員からいろいろ提言をいただいたことをきっかけに、新たな取り組みをやっていきたいと思いますが、やっぱり難しいのは、先ほどあったように、どちらかというと、今まで一本釣りだったんですよ、一本釣りという言い方は語弊があるかもしれませんけども、人づてにこういう人いないかって頼んで探してもらってたんですね。それに加えて、やっぱりマイナビとか、ＪＯＩＮというのを今までも活用しているんですが、そういったことで広く呼びかけながら、そんな取り組みをしてみたいというふうに思います。

○平　進介議長　12番、梅津善之議員。

○１２番　梅津善之議員　以上で終わります。

○平　進介議長　ここで、昼食のため、暫時休憩いたします。再開は午後１時といたします。

午後　０時０１分　休憩
午後　１時００分　再開

○平　進介議長　休憩前に復し、午前に引き続き会議を再開いたします。